

韓国仏教研修の旅

成河峰雄

はじめに

明治以降、日本は西洋文明を攝取することにつとめ、今日の繁栄を築いたが、それ以前の日本文化は中国文化を輸入し、その上で独自性を創造することによって形成されたというよう普通には見られる。土木・建築・工芸など技術面ばかりでなく、仏教・儒教・道教など精神文化についてもしかりである。しかし、日本文化の一翼を荷う仏教に関してみると、仏教が公伝されたのは百濟からであつたし、それは飛鳥仏教を開花せしめ、その後新羅仏教が伝えられ、それは白鳳仏教へと展開していく。独り仏教に限らず、日本の古代史全般を観るとき、韓半島（朝鮮半島）は文化の先進地域として、中国同様さまざまな形で影響を日本に与えていることに氣付く。

その影響はさらに時代を遡ることであろう。この観点に立てば実に、韓半島の民族は日本文化の母体が形成されるに少なからず

干与したということは自明できえあるように思われる。

それに反して、私たち日本人は韓半島に関して知らなさ過ぎるのではないか。韓国が「近くで遠い国」といわれるのはそのことを如実に示す言葉である。こうした認識から、韓国の仏教、広くは文化に対する理解を深める端緒にすべく、昭和五八年度禪研究所参禅会の研修旅行に「韓国仏教研修の旅」が企画された。

以下数日間の旅程を辿りながら、思いついたこと、考えたこと、感じたことなどを折りませて記していくことにしたい。

目次

七月二三日（土）名古屋—ソウル

ソウル金甫空港

ソウルの街並

景福宮参観

景福宮小史、壬辰の兵火

韓国仏教研修の旅（成河）

- 建春門
勤政殿
思政殿、千秋殿
修正殿
慶会樓
峨嵋山、曲水池、咸和堂、香遠亭
国立中央博物館
曹溪寺
曹溪宗・曹溪寺小史
曹溪寺参拝
曹溪宗総務院
結団式
ヨーリア・ハウス
韓定食の賞味
黄寿永氏との懇親
チマ・チヨゴリ
民族劇場
七月二十四日（日）ソウル—公州、扶余—俗離山
車中にて
ソウル釜山間高速道路
新しい村運動
李氏朝鮮時代の廢仏思想について
- 天安サーヴィス・エリア
たたきつけるような雨
高麗人参
公州・扶余の旅と百濟仏教
白村江の戦と百濟小史
扶余博物館
仏教伝来感謝の碑
定林寺趾石塔
公州博物館
武寧王陵などの見学
武寧王・聖王と仏教の伝来
俗離山法住寺
正二品松
一柱門、金剛門、天王門
大雄宝殿
捌相殿
國宝（石蓮池、四天王石塔、双獅子石塔）
総持禪院での歎談
弥勒石像
摩崖仏
俗離山観光ホテルにて
七月二十五日（月）俗離山—海印寺—慶州

朝のホテル

車中にて

キリスト教の教会

伽倻山海印寺

一柱門

大寂光殿

蔵経閣

図書館

韓国の国花

七月二六日（火）慶州市内

石窟庵

白衣の人々

仏国寺

仏国寺小史

青雲橋、白雲橋、紫霞門

多宝塔、釈迦塔

大雄殿

諸堂巡拝

芬皇寺、皇竜寺址

芬皇寺

皇竜寺址

慶州博物館

韓国仏教研修の旅（成河）

普門湖リゾート

七月二七日（水）慶州—釜山

通度寺

下爐殿、中爐殿

大雄殿

慈藏律師

観音殿

梵魚寺

諸堂巡拝

大雄殿、釈迦塔

住持と歎談

最後の夕食

七月二八日（木）釜山—大阪—名古屋

李舜臣の亀甲船

七月二二三日（土）名古屋—ソウル

8・30 名古屋空港・日本航空カウンター前集合。

今回の研修旅行の一切のお世話をしてくれる藤田トラベルの吉
田二郎、実広勉の両氏がパスポート類を団員に渡している。
10・15 日本航空 983 便、B—727 にて名古屋を飛び立ち、ソ

韓国仏教研修の旅（成河）

ウルに向かう。

隣国でありながら私たちにとつてほとんどその歴史、文化、民族性を知らぬ國に今乗っているこの飛行機が二時間もすれば下り立つのかと思うとひとりでに胸が高鳴りするのを覚える。

10：37 成層圏に入る。

雲一つない碧空が見え、太陽は燐々と輝やいている。

11：00 日本海上空。

11：59 ソウル金浦空港に到着。

ソウル金浦空港

空港には韓国観光旅行社のガイドである鄭徳子女史、韓国曹渓宗の修行僧で、本学の大学院生の崔庚滿氏、本学の卒業生である片山氏の三人が出迎えてくれた。

韓国観光公社は藤田トラベルが今回の韓国研修旅行に関して契約した現地の観光会社である。この会社に勤務するガイドの鄭子女史には私たちが韓国に滞在する間、最初から最後まで行動を共にして、観光案内ばかりでなく現地のホテル、訪問地との接渉もしてくれることになっている。藤田トラベルは私たちの旅行が仏教寺院を中心とするということから、その方面に湛能なガイドを特に依頼したことを聞いている。見れば、彼女の年齢は四十八、九歳位であろうか。崔氏は縁あって本学の大学院に入學し、禪学・禪思想史を専攻している曹渓宗の僧侶であるが、私たちの旅行が彼の

国の仏教寺院を中心とするものであることを聞き、是非力の及ぶ限りお世話をさせていただきたいという申し出をしてきた。その後彼は各寺院宛に日本から依頼状を出し、夏休みで、一時帰国してからも連絡を繰り返していた。私たちは彼の好意を無にしないよう研修の実を挙げなければならぬ。

片山氏は乗用車を研修団の団長である学院長のために用意していた。氏の運転で団長の侍者役の北村団員、それに崔氏とが車に乗り込んだ。他の団員は旅行社の手配してくれた観光バス一台に乗った。旅行社と提携しているカメラマンのキム氏、ソン氏の二名も同乗してきた。

12：40 金浦空港出発。

ソウルの街並

バスが走り出すと、鄭子女史の挨拶があつた。日本語が非常に満能であり、雄弁さにおいては私などを上回る。気丈な感じの人で頼もしい。私たちに印象づけられる韓国は彼女の翻訳、説明する日本語に大きく倚りかかることになる。

彼女はまつ先にソウルの発展振りを語る。全国の人口は四、〇〇〇万、ソウルは九〇〇万だという。総人口の約四分の一が首都ソウルに集中していることになる。東京が日本の総人口の十分の一であるから、稠密度において東京をはるかに上回る。このことはソウルとそれ以外の地との間でさまざまな問題を惹起している

ことであろう。

車窓から街並を眺めて先ず目に止まつたのは夥しい数の自動車の群れであった。よく見ると殆んどの車が韓国産のPONYの車であつた。日本車を探したが私の見た範囲では一台も目に入らなかつた。車は日本と逆で右側通行である。数年前、米国を旅行したとき最初に車に乗つたときの奇妙な感じを思い出した。

韓国第二の長さを誇る漢江を過ぎると、丘の斜面を利用した新興住宅と覚しき無数の一個建ての白い家並が見えた。ぼんやりと流れ去る景色を見ていて、私を或る落ち着き無さが支配した。その理由を鄭女史が話してくれる。韓国は山岳地帯に建築に用いる材木が全くといっていいほどに無く、現在家屋は石、レンガ、コンクリートから建てられる。木造家屋が殆んどである日本とは正反対なのだ。

街は到るところ地下鉄工事が進められ、ホテルの建設も盛んであつた。一九八八年のソウルオリンピックに備えてのものであろう。

鄭さんは私たちが大学関係者といふこともあるのだろうか、ソウルには延世大学校、高麗大学校という大学があり、それぞれ日本の慶應大学、早稲田大学と姉妹校となっており校風も似ているということ、梨花女子大学校という大学は未婚の女性のみ入学が許可されるというような話も弾む声でにこやかしてくれるのである。

13・10 景福宮到着。

景福宮参観

景福宮小史、壬辰の兵火

バスがまつ先に案内してくれたのは景福宮だつた。景福宮の案内書によつて簡単にその歴史を縹^{ひもと}いてみよう。景福宮は李氏朝鮮の正宮として太祖三年（一三九五）に創建された。同年は中国では明太祖二十八年に当り、日本では足利三代將軍義満の亡くなつた翌年になる。一五九二年、日本で言うと文禄元年であるが、太閤秀吉の命によつて日本軍が韓半島（朝鮮半島）を侵略したとき、同宮は全焼する。このときの出兵を日本では文禄の役と言つてゐるが、韓国ではこの年次の干支が壬辰であるところから、「壬辰の（倭）乱」と呼んでゐる。この壬辰の乱はひとつ景福宮ばかりではない。そのために多くの韓国の寺刹が灰燼に帰しており、現在の伽藍はその後の再建なのである。景福宮はと言うと、その後、二七〇年以上もそのままの状態であったが、一八六八年、高宗によつて創建当時の規模に復元され、再び正宮に返咲いたのである。丁度日本では明治維新があつた年である。一八九六年に至つて高宗がロシア公使館に難を避けたことにより、王宮としての歴史に幕を閉じる。一九一〇年の日韓併合とともに、勤政殿の真南と光化門との間に朝鮮総督府庁舎が建てられ、殆んどの殿閣が破壊され、今日見ることのできるのはそのとき破壊を免れたご

く一部のものに過ぎない。

建春門

景福宮にはその南端にあって正門としての光化門、北の神武門、東の建春門、西の迎秋門と、東西南北に四大門が配されている。旧朝鮮総督府が正門の光化門を入ったところにあるため、私たち観光客は東の建春門より境内に入るのである。

建春門の名は私たち日本人にとってことさら珍しいものではない。わが平安京の内裏の東門も建春門と言つた。されば、名の起源は中国にあろう。今、その名の淵源を探る暇はないが、『大臣注文選』卷五十七、三十二葉左（四部叢刊本）に「宋孝武の宣貴妃への誅」と題する謝希逸の文中に「建春を経て右に転び云々」という個所がある。李善の注は「洛陽県東城第一建春門」（『河南郡境閣簿』）の文を引く。

門より中に入ると、敬天寺十層石塔が聳え立っていた。これは高麗時代の一三四八年の造塔という。この石塔の前で始めて全員参加の記念写真を撮つた。

道路を挟んで北側に学術院、芸術院の近代的な建築物が白く輝いている。

勤政殿

暫し歩くと勤政殿の前庭に着いた。李朝は文武百官の朝賀、公式の国家儀式をここで挙行したのである。雄壮な屋根は二層の入母屋構造である。軒の斗拱、垂木等の丹青が真夏の太陽に映え、

色鮮やである。

前庭には正一品、二品、三品……というように記められたいくつの小さな石碑が勤政殿に向かって二列に並んでいた。これらは品階石^{ほんかいせき}と言うのだそうだ。式典のときにはそれぞれの品階石のところに各々その品階を持つ文武の官吏が立ち並んだのである。これらの品階は唐制に沿つたものであろう。日本にあっては、大宝令を見ると親王に対してのみ一品より四品と「品」を使い、諸臣は正一位、從一位……の如く「位」を用いている。

前庭から勤政殿に行くには石段を通る。左右には一対の獅子の石像が勤政殿を守護するように前庭の方角に向けて立っている。石段は二列になつており、その間に鳳凰の模様のある石板が敷いてある。鄭さんの説明によれば鳳凰は元々は竜だったのだが、それが鳳凰に変わり、また竜に復し、最終的に今の鳳凰に落ち着いたということである。

勤政殿の中に入ると、見上げる位置に国王が座つた玉座があつた。

思政殿、千秋殿

勤政殿を去ると、思政殿、千秋殿の見える一角に出た。昔は思政殿を中心に東側に万春殿、西側に千秋殿があつたと伝えられるが、万春殿は現在無い。中国では東は季節の五時のうち春、西は秋に配する。万春殿、千秋殿の名はそこから來たのであろう。四大門の建春門、迎秋門も同様に見てよからう。

勤政殿が唐の宮城で言えば太極殿であれば、思政殿は両儀殿に当たる。思政殿は国王が毎日政務をとったところである。それに對して千秋殿は君臣が學問を論じ合つた場所であるが、また李朝・世宗（一四一九一一四五〇）が二十八字からなる韓国固有文字である諺文（ハングル）を創制したところとしても知られる。ソウルの街をバスで眺めて多くの看板を見たが、殆んど漢字は見られず、ハングルばかりが目に付いた。世宗は文化英雄なのである。今や韓国を旅行して漢字の知識だけでは全く無力である。鄭さんはハングル文字は日本の仮名よりも数が少なくすぐに覚わりますよ、世界中の殆んどの国の言語を表記できます、と言つて話してくれる。

修正殿

思政殿、千秋殿の在る一角から西の方角に向かって歩くと、修正殿の入母屋作りの建物が見えた。もと世宗が図書館として用いていたときは集賢殿の名であったという。

慶会樓

修正殿から北上すると、西側に池を隔ててさわやかな慶会樓の雄姿が現われた。池の水は真夏の太陽の光を照り返してまぶしいほどだ。人の二倍位の高さの四十八本の白い石柱を礎石としている。石柱の間にある階段を登ると大広間になる。ここでは外に面した柱以外、何も遮るもの無く直接に戸外の風景に接することができる。慶会樓は外国使節の接待、或いは宮中での宴会場としてできる。

使用されたという。ともすれば堅苦しくなるこの種の集いも、或るときは晴れ渡つて明かに、或るときは雲がかかってかそけき仁王山の山容が蓮池と折りなす風致に心なごませたことであろう。

この建物も壬辰の乱（一五九二年、文禄の役）のときに石柱だけを残して樓閣は全て焼かれ、二六五年後の一八六七年、高宗が復元重建したという。

殿閣の偉容ばかりを見ていざさか疲れた旅人をやさしく癒してくれるのが慶会樓の風光であろう。

峨嵋山、曲水池、咸和堂、香遠亭

慶会樓をあとにして、私たちは峨嵋山、曲水池、咸和堂、香遠亭と歩いた。

峨嵋山は景福宮の寢殿である交泰殿の後苑であったという。宋の參知政事、范大成は「天下に登山の険峻なること、此を踰ゆる者無し」とその険峻を述べた、四川省峨眉県に聳え立つ峨眉山は亦峨嵋とも作り、両山の相対するさまが蛾の眉のようなので蛾眉とも名づけられる。景福宮の峨嵋山の名はこの峨眉山に由来するのであろう。峨眉は金蛾の触角のことでそれが細くてかつ長く曲がっているところから、美人の眉に比べ、遂には美人の代名詞となつた言葉である。いかにも、國王の憩いの場である後苑の名にふさわしい。中國・四川省の峨嵋山はまた普賢菩薩の靈場としても知られている。

峨嵋山には道路に沿つて、橙色の煉瓦を積み上げた八注の建物

韓国仏教研修の旅（成河）

があつた。正八角柱各側面には十長生、花鳥が描かれている。鄭さんはニコニコしながら

「これは何だと思いますか」

と団員にたずねるが、誰もこの奇妙な形をしたもののか正体をあてることはできない。

「煙突なんですよ」

鄭さんは微笑みながら言う。そして

「交泰殿の煙突をこの場所に持ってきて、このように技巧をこ

らしたり装飾を施したりしたんです」

と更に詳しく説明してくれた。

曲水池の名を聞いて直ぐにわが平安貴族の曲水の宴を思い出した。李朝の人々もここで流水に泛ぶ杯に酒を汲みながら、ほろ酔い加減で詩を作っていたのであらうか。

国立中央博物館

私たちは咸和堂、輯慶堂、香遠池、国立民俗博物館を遠くに眺めながら歩いていると、国立中央博物館が眼前に現われた。同博物館はその上に五重の塔と二層、三層の入母屋作りの殿閣が建っている不思議な建物だ。私たちは鄭さんの案内で館内を回る。日頃の運動不足のせいか、足が棒になり、いくつものコーナーに別れた館内がとても無く広く感じる。この博物館に至って彼女はその本領を發揮した。館内は古代の三国時代（高句麗、百濟、新羅分裂時代）、統一新羅、高麗、李氏朝鮮の各時代の夥しい数の

文化遺産を一同に展示している。鄭さんはその一つ一つを各時代の文化的特色の視点から的確に説明する。一瞬の淀みもなく滑らかに話すのは驚嘆した。これは職業意識に徹する彼女の生き方を物語るものだろう。

15..20 景福宮出発。
15..35 曹渓寺到着。

曹渓宗・曹渓寺小史

韓国仏教の宗派についてみると、高麗時代、大覺國師義天が天台宗を開宗するのにもなって、それまでの五教九山に天台宗を加えて五教兩宗と称するようになった。九山は中国の禅宗の流れを汲む九派であり、禅寂宗と総称される。五教兩宗と言ったときの両宗は禪寂宗改め曹渓宗と天台宗である。両宗と併称されるのでも分るように両者ともに五教の教宗に対しても禅宗である。その後、李朝の初め、仏教は十一宗に分れていたのを太宗によって七宗に合宗せしめられ、世宗に至って更に七宗は教宗と禪宗の両宗に分けられた（忽滑谷快天『朝鮮禪教史』三一六—三二二頁）。豊臣秀吉の日本軍が韓半島を侵略したとき、僧兵を率いて国家に功献した清虛休靜（一五二〇—一六〇四）は禪教二派に分かれていることの弊害を指摘し、凡ての教宗的色調は禪一色の中に解消された（江田俊雄「朝鮮仏教要説」）。李朝は一口に言えば崇儒排

仏の機運の盛んな時代で、忽滑谷快天は禅教衰頽の代と位置づけたが、末年に至ると仏教も新たな展開を示す。

一九世紀に入ると天主教が入り、儒仏道の三教を折衷した東学党が興起し、政府がこれら新宗教を弾圧したため、仏教に対する圧迫は緩和されるようになる。『九雲夢』あるいは諺文小説の影響で国民の間に仏教に対する郷愁が蘇り、又、日、英、独、仏等の諸外国と交渉をもつようになり、対仏教政策の緩和が進む。

こうしたとき、二人の日本僧の活躍があった。その一人日蓮宗の佐野前励は外国僧でも出入自由なソウルに朝鮮僧も出入すべきだ、と時の総理大臣金宏集に説き、李太王に三百年にわたる禁止政策を解除させた（一八九五年）。他の一人曹洞宗の武田範之は朝鮮仏教再興のためには仏教の団結・統一が必要であるとして仏教内外の有志に説きその賛同を得、ソウル東大寺門に元興寺を創建させ、大法山国内首寺院とし、各道は中法山、すなわち道内首寺院を定めさせた。一九〇八年には韓半島の全僧侶が会議を開き、半島の仏教のありかたは禪とか教とかに偏せず、円修しているのであるとして、円宗宗務院を設立した。そして、一九一〇年にソウルに覺皇寺、すなわち今の曹溪寺を建立し、ここに円宗宗務院を設置したのである。このとき宗務院の代表者李晦光は日本の曹洞宗と連合、同盟を締結しようとしたのに對し、一九一一年半島南部の寺院の僧侶は、半島の禪は太古普愚以来の臨済禪であると称して、松廣寺に臨済宗臨時宗務院を設置し、南北分裂の状態となつた。

覺皇寺の建立された一九一〇年は日韓併合の年である。朝鮮

總督府の、宗教団体に対する最初の立法措置として寺刹令が一九一一年に公布された。寺刹令施行の結果として、従来の寺刹は統括整理され、本寺三十、末寺一千三百七十一ヶ寺となり、一九二四年寺刹令の施行規則改正によって華嚴寺が加えられ三十一本寺となる。（江田俊雄『朝鮮仏教史の研究』「朝鮮仏教要説」）

一九一四年には禪教両宗を合わせ、朝鮮仏教曹溪宗が成立した。この間の事情は分らないが、朝鮮總督府の強烈な監督下に入った半島の仏教は円宗宗務院・臨濟宗臨時宗務院と南北に分裂した状態を脱し大同団結したものであろう。大戦後、一九六二年、大韓佛教曹溪宗総合宗團が発足し、三十一本寺制を二五教区制に改め、今日に至っている。

曹溪寺は創建時は覺皇寺の名であったが、日韓併合時代に太古寺となり、一九五四年、今の名に改称したという。創建時は円宗宗務院が設置せられ、朝鮮仏教曹溪宗が成立して以来、大韓佛教曹溪宗となつた今日に至るまで総本山としての地位を保つてゐるのである。

曹溪寺参拜

山門は曹溪宗の總本山らしからず小じんまりとしていた。山門を過ぎると、入母屋作りの大雄殿が現われた。斗拱、垂木の丹青は先ほどまで參觀していた景福宮の殿閣と同じである。このこと

韓国仏教研修の旅（成河）

はこの旅行で私たちが訪れた寺院についても同様であることを後になって知る。おそらく、私たちが今後韓国の寺院を想起するとき真先に臉に浮かぶのは丹青の鮮かな色彩であろう。大雄殿には東序側の入口から入った。中は多くの在家信者に埋められていた。驚いたことには老いも若きも男も女も各々五体投地のお拜をしている。曹洞宗の三拜の仕方とも異なる。中には小学生ぐらいいの年恰好の少女もいた。日本では在家信者でこのような深々とするお拜はついぞ見かけない。日本とは異なる韓国仏教信者の熱く素朴な信仰を私たちは初めて目の当たりに見たのであった。煩煩な教理とは殆んど無縁の一般信者は日頃のこうした寺院での本尊仏に対するお拜という実践によって仏教と堅固に確実に結びついている。信仰には無心になすこうした実践こそ重要である。

曹溪宗総務院

大雄殿の裏側に大韓佛教總務院、佛教新聞社等がある仏教会館の近代的な鉄筋コンクリートの白い建物が建っている。佐藤団員と私は總務院の代表者とわが團長との会見を希望して崔氏にそのことを申し入れた。崔氏は私たちを仏教会館に招じた。階段を登り、崔氏はある一室の前に私たちを待たせ、自分はその中に入つた。暫くするとドアが開かれ、崔氏は私たちを室内に導き、突当りのソファに坐らせた。間もなく總務院の幹部らしき人が向かいのソファに坐つたので、佐藤氏は会見の希望を述べた。それに對し、今は土曜日の午後であるので總務院の長を始め總務院に勤務している者は殆んどいないとの返答だった。それではどうことで、私たちは献香と、下見旅行で佐藤氏が交換を約束した曹洞宗の宗制とを渡し、この部屋を辞した。仏教会館から曹溪寺の方に向かうと、団員たちはすでに駐車しているバスの方に歩いていた。

16：00 ホテル新羅^{シンラ}到着。

結 団 式

ホテルに到着した団員はすぐに二階の KOREAN RESTAURANT SORABOL に入った。口の乾きを飲み物で癒した。結団式を日本では挙行できなかつたので、この場で行なつた。司会の佐藤氏が結団式の開始を告げたあと、團長の竹田学長から挨拶があつた。

日本に仏教が始めて伝来したのは百濟の聖明王が仏像、仏書を朝廷に獻じたときであるといわれています。その後も日本

の仏教は百濟から多くを学び、新羅になってからもいろいろと影響を受けております。団員諸氏には健康に留意して、

今回の韓国の仏教寺院を訪問する研修旅行が実りのあるよう

につとめていただき、土産ばなしをたくさん持つて帰つてください。
つづいて、司会者が研修団の各班長を紹介したあと、各人自己挨拶をした。最後に司会者から、今回の研修旅行に對して、学校

法人、大学の父兄会、建築会社の熊谷組から補助金があつたことの報告があり、結団式を終えた。

18..48 ホテル出発。

18..59 コーリア・ハウス到着。

コーリア・ハウス

韓定食の賞味

コーリア・ハウスの建物は純韓国式の建物なのであらうか。前庭から眺めると、数本ある柱はいずれも漢字が記された聯が掛かっていたことにいささか日本にはない異質なものを感じた。その後、私たちが参観した韓国寺院でも同様だつた。これなども韓国建築の一つの特徴といえるのであらう。この建物の扁額は「海鄰館」となつてゐる。

食事の間に入ると、まつ先に上座に韓国の風景を描いた屏風が目にひいた。団員は机を隔てて向かう形で坐つた。先ず一人一人に一本ずつビールが出された。アルコール分四パーセントである

ので、日本のライトビールに当たる。出された食事はいわゆる韓定食と呼ばれるもので、大小さまざまの白い皿に副食が盛られてゐる。とにかく皿の数が多い。更に驚いたことは箸が銀色の金属製であったことである。また、取り箸がなく、各自自分の箸で副食皿から取つて食べる所以である。それぞの箸でいたぐのはどんな場合でも一緒の食事をするときは家族の如き気持で食すべき

だというところから來てゐるとの説明をホテルへ帰るバスの車中で鄭さんから受けた。私は生まれて始めて韓国の食事を口にしたのだが、皿に盛られた料理はそれぞれ材料、色彩は異なるがいづれも大蔥、唐辛子などが入つており、味付けの仕方は同じようなのではないかと思つた。口あたりはよいが、私にはやや刺激が強過ぎた。

黄寿永氏との懇親

食事が始まって十分ほど経つたころ、東国大学校総長・黄寿永氏が訪れた。これは黄氏が崔さんの東国大学校時代の恩師であるところから実現したことである。初めに、団長と黄氏との間で土産物の交換がなされた。つづいて、団長から、大相撲の横綱隆の里の手形を写した色紙を収めた額縁が送られた。これはわが学院の財政部長・大塚道雄氏（団員の大塚隆寛氏の嚴父）の自坊が大相撲名古屋場所における隆の里所属の二子山部屋の宿舎をしている関係から、団員の青山優氏が大塚氏に依頼し、それを大塚氏が隆の里に話して実現したことである。

黄氏は一九一八年開城の生まれであるから六十四、五歳である。一九四一年に日本の東京大学を卒業し、同大学で文学博士の学位を得てゐる。一九五七年から東国大学校教授、一九七一年には私たちがこの日に訪れた国立中央博物館長に就任し、現在は東国大学校総長をされておられる。長年に渡つて日本に留学しておられたため、その日本語は日本人と変わらない。黄氏の『韓国仏

韓国仏教研修の旅（成河）

像の研究』は日本でも出版されている。氏は韓国仏像史研究の先駆者である。その白髪、穏やかな微笑み、健康を示す血色は長年、第一線で活躍されてきた風格を滲ませている。氏の仏像研究に対する冷徹な目、忍耐強さは氏の著書に接する者誰もが感ずることであろう。氏はまさに韓国の巨星である。

黄氏は研修団が百濟博物館を明日訪れると聞くと、それでは是非同じ道筋にある公州博物館も訪問されるとよい、私から館長に電話をしておきましょう、と言われ、団長先生はその申し出を快く受けられた。

チマ・チョゴリ

氏は三〇分ほど時を共にして帰られた。その後、戸田、山田両団員の詩吟が披露され、宴酣といつたところであった。この食事の間は韓国の風景を描いた屏風、韓定食、韓国式の床、座布団と、まさにここは文字通り韓国であるが、さらに花を添え私たちの心をなごませてくれたのかチマ・チョゴリを着た若いウェイタレスたちだった。彼女らは四人揃って空色の広袴、薄水色の上衣だった。その清らかな色どりはこの食事にさわやかさを与えた。

民俗劇場

食事を終えた私たちはコーリア・ハウスの中にある「民俗劇場」へ案内された。収容人員は百人ほどであろうか。映画館のように椅子に腰掛け、舞台上の踊りを見るようになっている。私たちは

入ったとき、すでに踊りは始まっていた。二十人ぐらいであろうか、若い踊り子が舞台を所狭しと踊り回る。日本舞踊を静とすれば、韓国のは動だ。動きが早い。彼女らの衣裳の彩やかなこと、手に持つ扇の大らかな華やかさ、私たちは息もつけぬほどにめくるめく踊りに釘付けとなつた。歌い手の歌声は異国語で解するべくもないが、時に弾み、時として沈む。その音調に韓民族の哀歎を感じたのは私一人だけではあるまい。

次に見た、一人の男をめぐる妻である醜女と美女との争いを描いた仮面劇は滑稽さと諷刺の入り混じつたものでこれも韓国一つの文化といえるものであろう。

この「民俗劇場」は外国人向きにつくられたものらしい。舞踊に関して素人の団員も皆華麗な踊りに魅せられたようである。おそらく技術的にも容貌の点でも優れた踊り子をえりすぐっているのではあるまいか。韓国料理と舞踊、それは私たちにとって遠い国韓国に来て味わつた最初の文化衝撃だった。あとで知つたのだが、民族劇場は土曜日、日曜日の夜に開かれるとのことである。

コーリア・ハウスを去り、ホテルに戻ったときは九時半を回っていた。

七月二四日（日）ソウル—公州、扶余—俗離山

車中にて

ソウル釜山間高速道路

南山の麓に建てられたホテル新羅をあとにして、私たちはソウル市街を通り、漢江を渡ると、まもなくソウル釜山間高速道路に入った。鄭さんの話によれば、この高速道路は故朴大統領の命令によって作られたのだそうである。見たところ、日本のように高架のところは殆んどなく地上にある。

新しい村運動

暫くすると、高速道路から農家の集落が見えてきた。鄭さんは

「皆さんには韓国的新しい村運動というのを御存じですか？」

と団員に尋ねてきた。彼女によれば、貧困から脱却しようとする韓国の農家の全国的な近代化運動を新しい村運動と称する。茅葺屋根は一度として見ず、青、赤、緑、黒などの瓦葺屋根の家屋ばかりが目に着いた。眺めていて気が着いたことは殆んどの家が回りを堀^{カムジヤン}で囲み、門付きの家が多かつたこと、また木造家屋はわずかしか見られず殆んどがコンクリート造りであることである。韓国は建築用の木材に恵まれないからだとは鄭さんの話である。日本では農家の伝統的な建築様式は少しずつ減ってきているが、韓国の場合はどうであろうか。

李氏朝鮮時代の廢仏思想について

韓國仏教研修の旅（成河）

鄭さんは

「お気付きになられたでしょうか。ソウルの街はお寺さんの数が少なかつたでしょ」

と言い、その訳も説明してくれた。李朝期は廢仏の時代であつて、ソウルの寺院は山岳部に追い遣られたので、ソウル市内は寺院の数が少ないんだ、という風に話してくれた。

彼女の話に少し補足しておこう。統一新羅、高麗ともに仏教は一方では護国仏教としての性格を持ちつつ、民衆の心に浸透していくたと見てよからう。高麗時代を眺めると、天台宗を開いた義天、曹溪宗を確立した知訥など高僧が輩出する中にあって、寺院は国家から寺田を施与せられ、その上、王室、貴族の寄附、農民の投托などによつて広大な田畠を有するようになった。それと共に長生庫などを運営して財産を増大させ、経済的に強力な実力者となつた。自衛のために独自の軍事力としての僧兵を保有することもしている。寺院の広大な土地は国家財政を萎縮させた要因の一つとして挙げられる。

高麗は李成桂によつて倒される。彼は高麗後期の新興勢力である士大夫階級の指導者として推載された武将である。彼らの闘争目標は大別すると二つあるとされる。第一は旧勢力が広大な土地を所有していた土地制度であり、第二は国家財政を萎縮させた仏教の排斥であったとされる。従つて、新王朝、朝鮮の基本政策として、儒教を政治、教育の根本理念に採択する一方で、仏教勢力

韓国仏教研修の旅（成河）

の抑制が挙げられたのである。李成桂自身は曹渓宗の無学自超を王師、天台宗の祖丘を国師として仏道に励んだとのことである。三代の太宗が就位するに及んで、排仏崇儒の政策を強烈に押しすすめた。曹渓寺のところで述べた如く、彼は宗派を合せ、寺刹を減じ、寺田を没収し、寺奴を軍丁とし、僧となる度牘の制を厳格にし、王師、國師の制を廃し、仏像、仏具を鋸潰して兵器を造るという暴挙をなした。十一宗（または十二宗）を曹渓、天台、華嚴、慈恩、中神、摠南、始皇の七宗に滅じている。次の世宗の代になると曹渓、天台、摠南の三宗を合して禪宗とし、華嚴、慈恩、中神、始皇の四宗を合して教宗となした。禪宗、教宗とともに全朝鮮にわたって各十八寺を中本山格の寺として公認し、首都漢城（現在のソウル）では各々の本山以外は破壊され、両宗の定員以外の僧は入城を禁ぜられたのである（成申書房『韓国文化史』、趙明基『朝鮮仏教史の研究』）。

天安サービス・エリア

車窓から「望郷の丘」を左手に見る。鄭さんからその説明を受ける。まもなく高速道路沿いの天安サービス・エリアに入り、暫し思いきり空気を吸い、からだを動かした。

二十分ほどで出発し、まもなくバスは玉山インターから高速道路を離れた。

たたきつけるような雨

バスは鳥致院を抜ける。道幅が次第に狭くなり、やがて木橋に

さしかかった。橋はバス一台がやっと通れるだけの幅しかない。ゆっくりと慎重に進む。渡り終えたところで、ダンプと擦れ違った。そのとき、バスの運転手とダンプの運転手とが互いに恐ろしい形相をして怒鳴り合った。何が何やら分らなかつたが、どうも橋をどちらが先に渡るかという優先権のことらしい。

この四囲あたりはプラタナスが並木をなして道路の両側に立つている。いかにもゆつたりとした真夏の田園風景である。暫らくすると、たたきつけるような雨がバスの車体に降り注いだ。時計を見ると十時二十分だった。

高麗人参

ここで鄭さんは高麗人参の話をしてくれた。六年間簾を掛けて日陰にして作る。その土地はすっかり養分を摂られてしまって、そのため、六年間は休ませなければならないのだそうである。強壮薬として古来から有名である。

10：45 公州市内に入る。

公州・扶余の旅と百濟仏教

白村江の戦い、百濟小史

公州は一時百濟の都であった。鄭さんはここで白村江の戦いについて語ってくれた。

百濟の歴史は近肖古王（三四六—七五）から始まる。この時代は百濟が三韓の一つ馬韓北部の部落国家連合の盟主たる地位を確

立した時期である。三七一年に高句麗を攻め、平壤城を落し、高

句麗の故国原王を殺した。

高句麗好太王碑文によれば、三九六年、高句麗は漢江以北大同江までの地域を奪回している。四七五年、高句麗軍は百濟の都漢城を陥落し、国王以下多くの王族を殺したという。このときの打撃はきわめて深刻なものであったと思われ、漢江下流域の奪回を断念し、百濟はこの公州の地を都に^{まわ}めたのである。公州は当時、熊津と言っている。

百濟は高句麗にはばまれて北進できなかつたため、その後は南下政策を採つた。全羅道一帯、新羅に奪われた地域を除いた任那諸国をその統制下に入れていた。五三八年聖王（五二三—五四）は公州（熊津）から扶余（当時は泗沘^しという）へ遷都した。扶余は公州から南西わずか八里のところにある。この遷都は一説には南進策が一応成功したので、その經營を本格的に進めるためとされる。その後、南下しようとする高句麗に対し、新羅との連合軍を結成し、漢江下流域を奪回したものの、その地域を新羅に奪われたため今度は新羅と抗戦し、徹底的大敗北を喫し、聖王自身も殺された。

その後幾多の曲折を経、百濟は六六〇年、唐・新羅連合軍の前に滅びた。王子余豊を擁した福信などの百濟復興運動が続けられたが、六六三年これを助けた日本軍は唐軍に白村江（綿江下流）で大敗し、百濟復興の望みは絶たれた。日本はここにおいて半島

経営の足場を全く失つたのである。

綿江での出来事は古代日本にとって極めて重大な転換点であった。因みにこの六六三年は大化の革新から二十年も経つていな

い。公州は綿江に面した街である。車窓から綿江の清冽な流れが見えた。人間の営みを凡て呑み尽してしまいかの如く大きな広がりを見せていて、鄭さんの話から私たちは古代の日本人が韓国にあつて戦つている姿を想像していた。

扶余博物館

私たちのバスは扶余の街路に入った。実は当初の計画のうちに扶余訪問はなかつた。団長が日本に初めて仏教が伝來したのは百濟からで、そのときの百濟の都が扶余であるから、できれば扶余にも足を運んだらどうだろうか、と言われ、担当者協議して決まったのである。今から思えば扶余を訪問してよかつた。百濟は古代日本の文化の輸入国である。私たちが古代に目を向けるときは必ず百濟に出会う。さまざまな面で日本は百濟と深く関わっている。

扶余の街に入つて先ず扶余博物館に到着した。この博物館は当地方で発掘した土器、瓦当、瓦片、装飾類等を多く展示している。

私たち日本人にとってはなじみのないもので、興味をそそられたのは近代的な博物館の前庭の石槽である。これは扶余邑官北里

韓国仏教研修の旅（成河）

で発見されたもので、今はここに移されている。円柱形台座の上に円底盤形の石槽が置かれ、その上を宝形造りの亭が覆う恰好となつてゐる。解説書には「大きな石を広く深くえぐって水を溜めるようにつくつた一種の石の容器で、主として宮中や寺院で用いられた」とある。

時に小雨が降つてきた。修学旅行中の女子高校生の団体であろうか。石槽の建物の軒下に入つて雨宿りをする。彼女らの若やいだ笑い声はまだ旅が始まつたばかりの緊張した私たちの心をなごませてくれた。小雨は真夏の暑い空氣を幾分か冷んやりとしてくれた。

12・20 レストランで昼食。

仏教伝来感謝の碑

昼食を済ませて、バスは扶余の街を走り綿江に掛かっている百濟大橋を渡る。バスを降りて直ぐに「百濟橋竣工記念」と誌された石碑があつた。竣工したのは最近のことのように思えた。その石碑を右手に見て暫く歩くと、「仏教伝来感謝の碑」があつた。よく見ると刻まれた文字の中に発起人の一人としてわが曹洞宗、永平寺の佐藤泰舜禪師の名があるのに気付いた。

定林寺趾石塔

仏教伝来感謝の碑をあとにして、私たちは百濟橋を反対側から渡り、扶余の街を行く。バスは定林寺趾に沿つた道路で停車した。鄭さんが「時間の関係で見たい方だけ見に行ってください」

と言うので、数人の団員がカメラを持って足早に定林寺趾に向かつた。外は小雨が降り続けている。

定林寺趾では花崗岩でつくられた高さ八・三三メートルの五層の石塔がその壯麗な姿を私たちの眼前に現わした。「大唐平百濟」（大唐・百濟を平ぐ）という文字が塔身に刻まれているとのことであるが、残念ながら急いでいたので見損つた。唐・新羅連合軍が百濟を滅ぼしたのは前述した如く六六〇年であるから、この事実を語る石塔の建立はこれより以後のことということになる。

百濟石塔として、この定林寺趾石塔と並んで有名なのは全羅北道（公州、扶余のある忠清南道の南）益山郡の弥勒寺趾の石塔である。解説書によれば、この石塔は東壁の一部を除く凡てが壊れており、もとは七層あつたと思われるが現在は六層で、高さは一四・二メートルにも達する韓国最大の石塔である。百濟石塔の始源形式とせられ、種々の点で韓国石塔全体の嚆矢的地位を占める。これに対して、私たちが見た定林寺趾石塔は各部が簡素化していて整備されている。弥勒寺石塔に始まつた百濟石塔の形式を整備し、定型化したものという。

私たち旅人は木造建築の如く精密なその姿に驚かされる。

14・06 公州博物館到着。

私たちは公州に戻り、公州博物館に立ち寄つた。この博物館は

仏教を日本に伝來したとされる聖王の一代前の王である武寧王の陵墓から発掘した文物を中心に陳列している。扶余博物館と比べると全体が小じんまりとしている。しかし、陳列してある武寧王とその後の日頃使用していたと思われる品々の精巧さ、造形美は私たちの心を捉えて余りあるものだった。王の在位五〇一—五二三は我が飛鳥時代の推古女帝の在位五九二—六二八と比べると一世紀も古い。百濟の文化水準の高さに驚嘆するばかりである。

14・30 公州博物館出発。

武寧王陵などの見学

暫くして私たちは宋山里の古墳群に至った。観行コースになっているらしく、若い男女のカップルがいた。私たちはごく限られた時間の中で見学したため、どの古墳が誰のものかを詮索する余裕もなかつた。ただ古墳の内部を見たのは私にとっては始めての経験だった。

武寧王・聖王と仏教の伝来

鄭さんはバスの中で武寧王陵のことをしきりと語ってくれた。これの発見は一九七一年（昭和四六年）であるから、今年昭和五八年の十二年前である。韓国の人々にとつてはおそらく、日本人が高松塚の発見のニュースを聞いたときに抱いた古代に対する懐しさと同様の思いをもつてその報道に接したにちがいない。鄭さんもその一人であつたろう。

武寧王陵は公州の宋山里にある。公州は文周王元年（四七五）

に漢城から遷都した地である。因みに漢城はソウル市城東区風納里の土城に比定される。

百濟への仏教伝来は『三国史記』によれば枕流王元年（三八四）、東晋から胡僧の摩羅難陀が伝えたという。枕流王は彼を宮廷に迎い入れて礼敬し、翌年、都の漢山に寺を創建し、僧一〇名を度した。しかし、旧漢山地区における百濟初期寺院址の確認はされていない。

百濟への仏教伝来の年次を『日本書紀』の記述から聖王二年（五二四）とする説もある。

宋山里で発見された古墳に副葬されていた墓誌銘から武寧王及びその後の陵墓であることが分つたそうである。内部はさながら仏の淨土を呈しているという。王及び王後の仏教信仰を受けての裝飾であろう。それ故、武寧王の時代（在位五〇一—五二三）にすでに仏教の伝来があつたと見ることができる。仏教の伝来は武寧王の一代前の東城王（四七九—五〇一）とする考え方もある。東城王の時代は中国・南朝の齊、武寧王の時代は梁のそれである。それ冊封下にあつた。

武寧王の次の聖王（五二三—五五四）は即位一六年（五三八）、泗沘（現在の扶余）に熊津（公州）から遷都している。少なくとも武寧王の時代に仏教が中国南朝から伝來したと見られるのだが、その韓国側の窓口は韓半島の西海岸から黃海に突き出た泰安半島の瑞山・泰安部落である。南朝からここまで水運によって

韓国仏教研修の旅（成河）

結ばれていて、ここから熊津（公州）は陸路、熊津から泗沘（扶余）までは綿江の水運によつて繋がつてゐる。仏教も含めた中国南朝の文化・文物の流れはこの経路を伝わつてきたと思われる。

私たち日本人として、聖王と当時の百濟の都である扶余とは是非記憶にとどめておきたい。それは聖王が日本に仏教を伝來した王であり、ときの都が扶余だったからである。それは『日本書記』の記述によるもので、五五二年、日本の欽明天皇一三年、聖王三〇年である。聖王から、日本の宮廷に使者を遣わし、仏教を伝來したという。送られてきたのは釈迦仏金銅一体、經論若干巻などである。

この『日本書記』の五五二年説に対し、現在、より信憑性が高いと思われる説がある。それは『元興寺伽藍縁起并流記資料帳』の述べるもので、ここでは五三八年を主張している。このとき送られたものは太子像灌仏の器及び説仏起書卷一筐といふ。この五三八年は百濟にとって大変な年である。この年に百濟は熊津（公州）から泗沘（扶余）に遷都しているのである。この遷都は狭隘な公州よりも広い平野を有する扶余の方が戦略的に有利であると考えたとみられる。

見方によつては仏教の伝來をさらに溯ることもできる。『扶桑略記』欽明十三年の條に、五二二年（繼体天皇十六年）に来日した司馬達等は大和國高市郡坂田原に草庵を結び仏像を安置して帰依していたという。仏教に日本人が接触したと推測される事まで

もたどれば更に時代は溯る。すなわち、『魏志』「東夷伝」、倭人条、いわゆる「倭人伝」によれば、二三九年（魏・景初三年）、卑弥呼の派遣した使者は魏の都洛陽に赴いている。この頃、洛陽では仏教はすでに行なわれていた。同様に『宋書』東夷伝、倭国条によれば、四二一年（永初二年）から四七八年（昇明二年）までの六十余年間に五人の倭王が宋の都の建康に使者を遣わしている。宋代は非常に仏教が盛んであった時代である。それ故に百濟の聖王以前にも仏像等が将来されるという可能性は大いにある。しかし、それは文献によつて確認できるものではないし、単なる「私宅仏教」であり、聖王よりの伝來は公的、中央的な「伽藍仏教」と称し得るものである。（以上、仏教の伝來等に關して田村円澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』の記述によつた）

15	..	00	武寧王陵出發。
16	..	40	休憩（十分）
16	..	20	俗離山に入る。

俗離山法住寺

俗離山の山容はその名のごとく世俗の垢を払いのけて清淨な心持ちにしてくれる。名は体を表す。十二曲の登り道を進むと、いくつもの山が近づいたかと思うと直ぐに遠のく。次第に温度が下がっていくようだ。俗離山は九つの山峰が聳えていることから「九峰山」とも言われ、或は「小金剛」とも言われてゐる。

正二品松

途中、正二品松と言われる古松の横を通る。鎌田茂雄博士『朝鮮仏教の寺と歴史』にこれについての記述がある。「李朝の世祖が頬病にかかり、療養をかねて福泉庵へ参詣の途中、この松が王を迎えるや、道をはばんでいた己れの枝を高く持ち上げて王を通してしたという。これに感激した王はこの松に正二品の官位を与えて報いたという」とある。ガイドの鄭さんの説明もこれと同じであったかと思う。

ところがこれには異説がある。それは愛宕顯昌氏『韓国仏教史』の説である。これによれば世祖（一四五五—六八）ではなく「李朝二代の太宗（一四〇〇—一八）が法住寺へ参詣の途次、この松のところまで来ると王の乗った輿（輦）が松の枝にひつかかって動かなくなってしまった。そのとき太宗王は『余の歩みを止めらる力があるとは余程の実力者に達いない。少なくとも、二位以上上の貴族でなければ出来ることではない筈だ』と云つてその松に品二位の位を与え、「輦松」と名づけたと伝えられている」と述べている。

私たちには両説の真偽を云々することはできない。ただこの古松の枝振りを素直に感動すると同時に、仏教を圧迫した李朝の王もこの幽邃なる仏教の靈蹟を参拝したことがあつたのであろうと思えばよがろう。

一柱門、金剛門、天王門

韓國仏教研修の旅（成河）

寺域に到着する。樹木の鬱蒼と茂る「五里の林」を抜け水晶橋に至る。橋を渡ると、「湖西第一伽藍」の扁額の掛かった一柱門が目に入る。さらに金剛門、天王門と進む。

天王門の前で、俗離山の修行僧で、最近までアメリカの大学に留学していたという崔氏の友人が出迎えてくれた。彼が天王門の説明をするのを鄭さんが訳す。仏教の専門用語が時々飛び出す。そのつど彼女は滞みなく私たちに伝える。彼女の語学力と仏教に対する造詣には驚嘆する。よい人に来てもらつた、とつくづく思う。説明役の崔氏の友人はきちんと僧服をまとい、きりっと背筋を伸ばし、その眼はあくまで澄んでいる。その落ち着いた態度は彼の修行が本物であることを物語る。自己の生き方にしっかりとした信念を持っているのであらう。彼は将来、韓国仏教のすぐれた指導者になることであろう。

大雄宝殿

大雄宝殿の屋根は二層である。中に入ると本尊仏の毘盧遮那佛、脇侍として本尊化の右に盧舎那仏、左に釈迦牟尼仏の三尊仏が奉安されているのが見えた。坐仏としては韓国内で最も大きくて四大雄宝殿の一つとの説明である。ただし、鎌田茂雄博士の『朝鮮仏教の寺と歴史』では無量寺の極楽殿、華嚴寺の覺皇殿とともに三大仏殿といわれるとのことである。

かかる三尊仏の形式は日本ではそんなに見かけないのでなかろうか。盧舎那三尊として日本で見られる形式には脇に觀音、虚



法住寺の伽藍と山容

空藏の両菩薩のもの、薬師、千手觀音のもの、十一面觀面と弥勒菩薩のもの等がある。私たち禪宗に関する者はこの三尊仏の名を聞けば直ぐに十仏名を思い出す。曹洞宗の十仏名は「清淨法身毘盧舍那仏、円満報身毘盧遮那仏、千百億化身釈迦牟尼仏……」となっている。臨濟宗、黃檗宗は毘盧遮那仏となっており、文字が違うだけである。松浦秀光氏によれば称名仏は釈迦牟尼佛に始まり、律宗の道宣によって十仏名の現形が出来、天台及び禪宗に伝承され、禪宗においていくつかの改変がなされたとのことである。この法住寺のもとを築いたのは真表律師とその弟子永深であるが、この二人の伝は弥勒菩薩との因縁を語るが、毘盧遮那仏の信仰は出来ない。

捌相殿

捌相殿は五重の塔だった。捌相殿の中に入る時間がなかったのは残念だった。釈迦如来の一生を描いた「八相圖」が奉安されているという。捌の音は八と同じであるため、八の代わりにこの文字を用いることがある。捌相殿は「八相殿」の意味である。

國宝

捌相殿の前に國宝の石蓮池、四天王石塔、双獅子石塔があった。これらも時間の関係でゆっくり見ることができなかつた。

総持禪院での歎談

私たち一行は小雨の降る中、「総持禪院」と扁額の掛かった庵に案内された。履物を脱ぎ、招ぜられたところは二十四、五疊ほ

どの広さの部屋だった。坐っていると自然快適な心持ちになつた。直ぐに気付いたのだが、床が暖房されているのである。これがかつて聞いたことのあるオンドルなのかと思つた。扉が開け放たれていて蒸し暑さはなく爽やかである。暫くすると法住寺の住持老師が入室され、団長との土産物の交換がなされた。茶の接待を受け、私たちは暫し打ち解けたひとときを味わつた。

弥勒石像

一柱門を禅宗伽藍配置の山門と同じく南側にあると見たとき、西側の山を背にして立つてるのは高さ三三メートルの弥勒石像である。余りに高いので、その尊顔を眺めていると首が痛くなる。造像は一九六四年といふからまだ二十年も経過していない。

法住寺のもとを築いた真表律師が弥勒菩薩の教えによって悟道したという『三国遺事』巻四の記事は新羅時代、弥勒信仰が盛んであったことを示していると同時に法住寺と弥勒菩薩との因縁浅からぬことを示す。この石像の位置にはかつて竜華宝殿が建つていたという。竜華宝殿は弥勒が兜率天から下生して竜華樹の下で三会の説法をするという『弥勒大成仏經』『弥勒下生經』の思想に由来するものであろう。弥勒の像としては半跏の姿をした弥勒菩薩の像と下生して修行を経て正覚を成じる弥勒仏の像との二種類がある。竜華宝殿の主尊は無論、弥勒仏の像であつたろう。今、私たちがお参りしているのも右手が施無畏、左手が与願の結印をした弥勒仏である。韓国々民の熱烈な弥勒信仰を史書は語

る。今までここに新たな弥勒信仰の拠点を私たちは見ているのである。

摩崖仏

境内を巡り、最後に私たちが出会つたのは墜來岩の岩肌に刻まれた摩崖仏であつた。私は九州の国東半島を旅行したときに見た摩崖仏を思い出した。法住寺の摩崖仏は一体の倚像で、如来像にはちがいないが、それ以上のことは確認することができなかつた。

18..30 法住寺を辞す。

18..40 俗離山観光ホテル到着。

俗離山観光ホテルにて

俗離山観光ホテルは前日宿泊したホテル新羅の近代的な設備と比べると地方の旧式のホテルといった感じは否めない。団員はひとまず各自の部屋に荷物を運ぶのに一台しかないエレベーターに乗る。十名程乗ると一杯になる。おりしも小学生の林間学校の児童が歓声をあげて何度も上がり下りしているので、なかなか乗ることができない。団員の顔にも暑さと一日の疲れのため、いらだちが見られた。

部屋に着いて荷物を置く。各自指定された食堂に集まつた。ビールを一口飲んで、やつとひと心地できた。団員たちも次第に饒舌になり、冗談も飛び交うようになつた。

韓国仏教研修の旅（成河）

七月二五日（月）俗離山—慶州

朝のホテル

俗離山の朝の空気はさわやかである。こうした靈氣こそこの地で修行する雲衲の心を鼓舞するのではないか。昨日ホテルに着いたときは暗闇に閉ざされていて、囲りの景色は全く見えなかつたが、今朝は清かに新鮮な山岳の風光が広がつてゐる。木々の緑が濃淡とりどりに織りなす自然の文は見事だ。

8..15 ホテル出発。

車中にて

俗離山から国道三七号線を走る。報恩の街を抜け沃川に至る。沃川からソウル—釜山間高速道路に入る。沃川は景勝の地として有名で、故朴大統領夫人の故郷なのだと鄭さんは話す。

9..40 秋風嶺サービス・エリア到着。

この頃になると、雲も殆んどなくなり、壮快である。

10..00 同サービス・エリア出発。

洛東江の長い橋梁を過ぎると、間もなく西大邱インターに入り、これより高速道路をはずれ、一般道路となる。大邱は直轄市で、韓国で最も暑い街で紡績産業が盛んであるとの鄭さんの話である。

10..40 西大邱インターを出る。
キリスト教の教会

車窓の景色を眺めていて、時折キリスト教の教会が建つてゐるに気が付いた。一九七五年の韓國文公部発表によれば、仏教の信徒数は一、一九七万二、九三〇人、キリスト教は四〇一万九、三三人と仏教信者の方が圧倒的に多いのだが、寺院数、教会数となると、仏教が五、六九二ヶ寺、キリスト教が一万六、〇八五教会と断然キリスト教の方が多い。日本ではどの街、村へ行つても仏教寺院を見かけるが、それほど多くはないにしても、韓国ではキリスト教教会をよく見かけることになる。仏教寺院の少ないのは前述したように李朝の排仏政策のしからしめたことである。

11..25 伽倻山のスカイラインに入る。

11..58 同スカイラインの通行料を支払う。

12..07 麓のレストランで昼食をとる。

12..55 レストラン出発。

海印寺の門前までバスで行くが、あとは徒歩となる。

伽倻山海印寺

一柱門

濃緑の樹木の間に「伽倻山海印寺」と書かれた扁額を掲げた一柱門の壯麗な姿が見えた。この門をくぐると、世界的な文化財、高麗大藏經を誇る海印寺に入るのかと思うと興奮と緊張を感じ

得なかつた。門は内と外とを全く別世界に置く。一步足を踏み入れることにより私たちは海印寺の聖域に身を置くことになるのだ。

寺号の「海印寺」は華厳經の「海印三昧」に由来するのである。山号の「伽倻山」は標高一、四三〇メートルの伽倻山をそのまま山号としたものと思われる。私たち日本人にとって「伽倻」という言葉は別の意味合いをもつ。三国時代（高句麗、百濟、新羅の三国に分裂していた時代）、新羅・真興王（五四〇—五七六）が五六二年（日本・欽明天皇二三年）現在の高靈（海印寺の西南）にあつた大伽耶を滅ぼしたことにより、洛東江流域の加羅諸国が新羅の領有に帰す。これ以降、日本の半島經營の地、任那の復興対策の相手国が新羅となるのである。欽明天皇の次の敏達天皇の代から対新羅交渉が活発となり、やがて新羅仏教が日本に輸入されるようになる。新羅は日本の大唐學問僧を自國の送使を使って日本に送り届けさせることもある。日本はこうした情況の中で百濟仏教の影響のもとに育った飛島仏教から白鳳仏教へと変貌していったのである。こうしたことより見て、伽耶は古代日本人にとっては画期的な地名であつたにちがいない（田村円澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』）。

また、伽耶という言葉を聞くと、仏教徒はすぐに釈尊成道の地、仏陀伽耶を思い起すであろう。インドにあっては伽耶山は二処あるとされる。一つは釈尊説法の地として有名な摩揭陀國・王

舍城の近く、他の一つは仏陀伽耶の近くにある山である。伽耶山は翻じて象頭山という。

『三国遺事』卷四「義湘伝教」によれば、新羅の華嚴宗の開創者・義湘（六二五—七〇二）が教えを伝えたとされる十刹の中には海印寺が入っていることも銘記しておく必要があろう。

大寂光殿

一柱門、鳳凰門（「海印叢林」の扁額を掲げる）、解脱門と行くと九光樓が私たちを出迎える。九光樓は樓門であるが、正面ではなく向かって右側すなわち東側が通り抜けができるようになった構造になつている。

九光樓を過ぎると、禪宗伽藍の仏殿に相当する大寂光殿が雄壮な姿を現わす。大寂光殿と私たちとの間に中庭が横たわる。中庭は東側に國宝になっている石造の三重の塔と灯籠が建ち、大寂光殿を華麗にひき立てる。

中庭から二三段もの石段を登つたところに大寂光殿は建つ。中に入ると金色に輝やく三尊仏がお祀りしてあつた。住僧に尋ねると、中尊が毘盧遮那仏、脇侍が文殊、普賢の両菩薩とのことだった。寺号の海印寺が華嚴經に由来するのであるからこの寺は華嚴經の教えを信奉する人々によつて建立されたのであらうと思いつければ、華嚴經の教主毘盧遮那仏（八十華嚴經ではかく言う。六十華嚴經では盧舎那仏と訳す）を中尊とするのも直ぐに理解がいく。前述したように、義湘が伝教した十刹のうちに海印寺は入つて

韓国仏教研修の旅（成河）

いる。義湘は中国華嚴宗を大成させた法藏の兄弟子に当たる人で法藏とともに智儼のもとで華嚴經を学んだ経験をもつ。その義湘が伝教したところから海印寺の名が付けられたのかかもしれないという推測が成り立つ。しかし、野村耀昌氏「三国遺事解題」（『國訳一切經』和漢撰述部、史伝部十所収）によれば、同寺の実際の開創は新羅第四〇代哀莊王三年（八〇二）秋、順心、大德の兩大士が王の援助を受けて建立したのに初まるものの如くであるとされる。そうであるとすれば、この兩大士も華嚴系統の人であろうか。脇士の文殊、普賢の両菩薩は東海道五十三次を作る発想のもとになつたといわれる、善財童子が五三人の善知識を訪ねて教えを乞う『華嚴經』「入法界品」に登場する。文殊菩薩はその最初に、普賢菩薩はその最後に姿を現わしている。

蔵経閣

韓国には「三大寺刹」という言葉がある。仏教では釈尊以来、比丘になるときに仏法僧に帰依することを誓う。仏法僧は三宝と総称するが、このどの一つがなくなつても最早仏教は存しないとされる。三宝は仏教が存在する標識なのである。それ故、韓国などの寺刹においても三宝は存するわけであるが、三宝のうちの一つが韓国内の他の寺刹に比して圧倒的に顕著に存在するという意味において、三大寺刹といふことがいわれる。仏宝の通度寺、法寶の海印寺、僧宝の松廣寺がそれである。こうした言葉が生まれるのは韓国内の寺が殆んど曹溪宗一色となつてゐることが基盤に

あるのであろう。

海印寺が法寶とされるのは高麗大藏經を保管しているからである。高麗大藏經は現存する大藏經の中で最も學術的に優れたものとみられていて、世界の佛教徒全體の法寶なのである。高麗第八代顯宗（在位一〇一〇—一三二）の二年（一〇一一）勅命によつて雕造が開始された。その後九代德宗、十代靖宗、十一代文宗、十二代順宗を経て、十三代の宣宗（一〇八四—九四）四年（一〇八七）の頃に完成されたといふ。実に七六年間の歳月を費したのである。まさに国家的な大事業であった。この版木は符仁寺に保存された。大覺國師義天（一〇五五—一一〇一）は文宗の子、宣宗の弟であり、大藏經雕造完成を目あたりに見ていたので統藏經刊行を発願し、父王の創建した興王寺に住し、この寺に教藏都監を置いて刊行し、版木も同寺に保存された。この二種の版木は二三代高宗一九年（一二三二）蒙古軍の侵攻により焼失する。高宗は仏天の加護を願つて、高宗二三年（一二三六）再び大藏經の刊行を企画する。開城から一時遷都していた江華島の大藏都監と南海島の分司都監とにおいて雕造がなされた。江華島に収藏されていた版木は李朝、太祖七年（一三九八）五月、ソウルの支天寺に移され、さらにその年のうちに海印寺に運ばれたのである。それが現在、海印寺裏蔵の八万大藏經なのである（鎌田茂雄博士『朝鮮佛教の寺と歴史』）。

大藏經は蔵経閣に收められていた。蔵経閣は大寂光殿の後方、

さらに高台にある南北二棟からなる。大寂光殿から歩いて手前を修多羅殿、奥を法寶殿という。ともに正面一五間、奥行二間の細長い建物でこの中に大蔵經の版木が蔵されている。二棟の間には中庭があり、中庭の東西両側にも一棟ずつ小さな建物が建ち、雑版が陳べられているとのことである。私たちは特別のはからいをもって蔵經閣の内部に入るを得たのだった。団員は版木の陳列してある様を観察した。四、五名ずつ版木を手にとつて写真撮影した。私たちはこの経験を軽々に見ではなるまい。高麗大蔵經は韓民族の熱い情念が生んだかけがえのない人類の文化遺産なのであるから。

版木の用材は厚朴という白樺に似た木で、木材を切り三年間海水に浸してから板にする。それを塩水で蒸し、蔭干しにしたのち鉋で削る。それに経文を書き雕る。版木がゆがまないよう、銅板の縁取をし、漆を塗る。経板一枚の大きさは縦約二四センチ、横六九センチ、厚さ三センチで、枚数は八万一、二五八枚、一、五一一種六、八〇五巻に達する。一面二三行、一行一四字に正確に彫られている（国際仏教徒協議会『韓国の古寺ガイド』）。

海印寺の伽藍は幾度となく火災を蒙ってきたが、蔵經閣だけはその都度禍を逃れたため版木が今日に伝わってきたのである。それ故、蔵經閣は「三災不入之處」と呼ばれているという。

図書館

最後に私たちは同寺の図書館に案内された。出された清涼飲料

水は団員には何よりもてなしであった。住僧から図書を充実させたいので御協力を願いたいとの要請があった。韓國の法寶たる海印寺の一遇に私たちの手になるものが置かれることがありがたい話である。その他、私どもにでき得る範囲内での協力を約した。この図書館には日本、台湾など外国の仏書が備えられてあった。二十分ほどのくつろぎのひと時を過して私たちは同寺をあとにした。

15..15 海印寺発。四、五〇分後、ソウル—釜山間高速道路に入る。途中、平沙ドライビングで一五分ほど休憩。
17..35 慶州インター・チェンジより高速道路を出て慶州市内に入る。

韓国 の 国花

鄭さんは慶州市内に入ると「皆さんは韓国の国花、国花を御存じですか」と団員に語りかけた。日本の国花は桜だということは日本人なら誰でも知っている。しかし、韓国の国花となると、余り知る人はいないのではないか。「無窮花なんですよ」と鄭さんは教えてくれた。どうして国花が無窮花なのかというその理由について、鄭さんは無窮花はどんなに痛みつけられても花を咲かせる。そのことと韓民族の歴史とが似ていると説明する。考えてみれば、私たちが知る限りにおいても韓半島は漢の武帝によって樂浪郡など四郡が置かれて以来、たびたび北方、或は南方の日本

韓国仏教研修の旅（成河）

より侵略を受ける。その都度、民族的な英雄が登場し、彼らが中心となり、勇猛に戦う。隋の侵攻のときの高句麗軍の総司令官であつた乙支文徳將軍、唐が侵略したときに抵抗した淵蓋蘇文、契丹族の侵入のさい武勲を立てた姜邯贊、壬辰倭乱の際、陸で活躍した金応瑞將軍、海上戦で総指揮官となつて日本の豊臣軍を敗北させた李舜臣提督など多くの民族英雄の名が遺つてゐる。韓国の長い歴史は外国との外交、戦争の歴史でもある。

18..00 慶州朝鮮ホテル到着。

ホテルには午後六時に到着したものの、直ぐに部屋に入れてもらえず、ロビーで待たされた。藤田トラベルの吉田氏によれば同社は韓国観光旅行社を通じて今日の夕食は普門湖に面した湖畔荘でとることにしておいたのだけれども、月曜日は休業日となつてゐるから、ホテル内で食事ができるよう交渉中とのことであつた。二、三〇分して、ホテルとの接渉の結果ホテル内の食堂で夕食がとれるようになり、それぞれ決められた部屋に入った。部屋の窓から普門湖が見えた。湖面が夕日で真赤に染まつてゐる。湖の伸びやかな広がりはうつすらと見える慶州の山容と融け合う。

19..30 ホテルで夕食。

旅行も峠を越した安堵感がビールでほてつた身体に湧きあがつてくる。明日もこのホテルで泊まることになつてゐる。旅行中初めて味わうゆつたりとした夜のひとときである。

七月二二六日（火）慶州市内

8..40 ホテル出発

石窟庵

バスは吐含山のスカイラインをゆっくり登つていく。頂上近くに広々とした駐車場があり、バスはここで私たちを降した。周りを見回すと、ここから眼下に慶州の街が一望できるのに気がついた。

駐車場から暫らく歩くと「叱含山石窟庵」の扁額のある一柱門がある。山伝いの道を歩くと庭があり、そこから左側の石段を登つていくとお堂があつた。その中が石窟になつてゐるようである。中に入ると、正面奥に人の身長ほどの高さの蓮華台上に釈迦如来の石仏が坐つておられた。その慈愛に満ち満ちた尊顔に我を忘れる思いであつた。石窟の中は手前から前室、扇道、円室と名づけられた三つの部分から成つてゐる。前室は右側に乾闥婆・天・摩睺羅伽・迦樓羅、左側に竜・夜叉・緊那羅・阿修羅の八部衆のレリーフが並んでゐる。扇道の入口両側は一対の金剛力士像である。扇道両側は右側に北方多聞天（毘沙門天）、東方持國天、左側に南方廣目天王、西方增長天の四天王のレリーフが配されてゐる。円室はその名の如く釈尊を圓くとり囲むように十大羅漢、十

大羅漢の上方には釈尊の十大弟子（摩訶迦葉、舍利弗、目犍連等）

がそれぞれ円形の部屋におられて同じように円くなつて釈尊を見つめる恰好になつてゐる。ただ釈尊の真後ろだけは十一面觀世音菩薩が控えておられる。そして円室の入口には右が帝釈天、左が大梵天王、その奥に右に文殊菩薩、左に普賢菩薩が並んでゐる。崔氏が本尊仏の前卓に備え付けてある一対の燭台に蠟燭を灯し、線香を立てたところで、団長を導師に加島竜童団員を維那に般若心経を諷経した。この空間はまさに仏国土だ。高さ三・四メートルの白色の仏を迎ぎみて私たちは心を込めて拝んだのであつた。

石窟を出て、前に登つてきたときと反対側の石段を降り、寿光殿、宝月殿、寂黙堂を巡つた。

前庭から雲一つない碧空の下になだらかな山並が遠望できる。ここは海拔七四五メートルとのことである。ときおり風が心地よく吹きつける。

白衣の人々

私たちはコーリア・ハウスで鮮やかなチマ・チョゴリを着た踊り子の流動美に魅せられた。今、一柱門を目指して山沿いの参道を戻る私たちと擦れちがう人々の服装を見て思わず、はつとした。男女十二、三人の一団であるが、二、三人は洋服を着ているが、そのほかの人々の身にまとっているのは純白の民族衣裳だった。『魏志』、『隋書』には「新羅の服色は素を尚ぶ」とあるし、『宋

史』にも「高麗の士女は皆素服」とあり、古代から韓国の人々は白衣を着ていたといわれ、現在にもその伝統がつづいているのである。韓国の人々はこのことをどう見てゐるか。このことについて、古川清徳氏は『韓国の素顔』(三修社)の中で金烈圭氏が『韓国人の心理』の中で述べているのを引用してゐる。私もそれを参考までに引いてみよう。

韓国芸術を代表する色は白色や抑制された中間色であるとはいへ、原色の使われている度合いは日本人以上といえる。丹青の建築物の華やかさは、日本ではなかなか見られないようだ。したがつて、韓国人が白色を好むのは、華やかな色彩に興味がなかつたからではなく、まして、色彩感覚が発達していないなかつたからではない。四季の移りかわりとともに変化する美しさを、あるがままに鑑賞するという美意識が根底にあり、人為的にあえて華やかな色彩を家の中に引き入れる必要がなかつたからであるといえよう。

景福宮以下、いくつもの建物を彩る丹青の美を見、その色彩に驚かされた私たちは大いに傾聴に値する意見である。

仏国寺小史

仏国寺の山号は吐含山で、石窟庵と同じである。仏国寺発行の『仏国寺・石窟庵』によれば、仏教を新羅の国教とした法興王の韓國仏教研修の旅（成河）

韓国仏教研修の旅（成河）

一五年（五二八）、王の母后迎帝夫人と王妃の発願によりここに寺を建て、華嚴仏国寺、華嚴法流寺と名づけた。文武王（六六一

一六八一）はここに無説殿を建て、義湘、悟真、表訓を招き華嚴經を講論させた。景德王一〇年（七五一）、宰相・金大城は名匠阿斯達の手をかりて多宝、釈迦の両塔と青雲、白雲の両橋を造り、石窟庵を創建した。その後幾度も重修が加えられたが、朝鮮、宣祖二六年（一五九三）壬辰の倭乱のとき兵火で、二、〇〇〇余間の大伽藍が焼失した。一六一二年、海眼和尚がその一部を復旧し、一六五九年、天心和尚が大雄殿を重創した。一九七〇年、朴大統領により今日のごとく整備され、現在、仏国寺禪院、仏国寺講院も運営していることである。朴大統領は慶州がその中に属している慶尚北道のうちの善山の出身であったところから、仏国寺との因縁があったのである。

金大城の伝は『三国遺事』卷五「大城二世の父母に孝せる」とに詳細に出ており、貧女の児として生まれた金大城は興輪寺なる寺の六輪会に傭田を布施し、まもなく物故したがその徳のため、國宰の金文亮の家の児として転生する。壯年となつた大城は現生の二親のために仏国寺を創し、前世の父母のために石仏寺（のちの石窟庵）を開き、神琳、表訓の二師を請じ、各々住させた、とある。これによれば、大城は石窟庵ばかりでなく仏国寺も創建したことになつておらず、先の仏国寺の説明書きと異なる。説明書きの方は東京大学所蔵「慶尚道江左大都護府慶州東嶺吐含山

大華嚴宗仏国寺 古今歴代諸賢繼承記」によつていると思われる。

青雲橋、白雲橋、紫霞門

一柱門から境内に入り、庭園の中を歩いているとアーチ型の石橋にさしかかる。これを渡り終えて数歩歩くと二十段ばかりの石段を登つたところに天王門がある。さらに行くとやがて、紫霞門の壮麗な容姿とそれに登るための石橋、青雲橋（上方で一八段）、白雲橋（下方で一六段）の見事なコントラストが目に入つた。紫霞門の両側は堦が門と平行に連なつていて、青雲・白雲橋は実は一つの橋で、両橋の間はやや広まつた段がある。両橋ともにその中央に平らな石板が石段の列と平行に置かれた恰好になっている。石段の数は両橋とその境の一段とで三三段ある。俱舎論によれば忉利天に帝釈天以下三十三天がおられるとされる。又、観音菩薩の数も三三とされる。インドのリグ・ヴェーダも神の数を三三とする。いずれにしても三三はインドにおいては重要な数である。

多宝塔、釈迦塔

私たちは白雲、青雲の橋を渡つて紫霞門を通つたのではない。

通常の場合、この高貴なる文化遺産を通行することはできないことになつてゐるのだ。一、二三〇年以上前にできた文化遺産をこうした形で保護することは当然のことである。紫霞門の奥に建つ大雄殿の前庭には東側の回廊を抜けて入つた。この庭には大雄殿に

向かって右側すなわち東側に多宝塔、左側すなわち西側に釈迦塔

ください。

が対をなして日輪のもと、白い容姿をまぶしいほどに照り返している。この両塔は花崗岩の石塔である。前述した、仏国寺・石窟庵の説明書きに大城は青雲・白雲橋、多宝塔、釈迦塔、石窟庵を名匠阿斯達の手をかりて造ったとあつたが、これらすべてを見てみると、そこに共通する古今屈指の新羅の石の造形芸術の粹を感じ取ることができる。これらは歴史、民族を越えて、見る人に静かな感動を呼び起すことであろう。

大雄殿

大雄殿の中に入ると、金月楼住持の出迎えを受けた。そして次のような心込もる挨拶があつた。

遠方よりよくお越しくださいました。心より歓迎いたしました。私は当山の住持、金月楼と申します。仏国寺は単一の寺としては国内で最大の規模を誇っております。現在一五〇名の修行僧が日々厳しい修行を続けております。この寺は新羅時代の貴族が建てた寺です。当山には日本から多くの方がお参りに訪れます、仏教関係の方の参拝は非常に珍らしいことです。これを機会に一層韓日仏教者の交流が盛んになることを希望いたします。貴大学には私ども曹渓宗の者がお世話になっておりますが、どうか日本への留学僧に対して陰に陽に手助けをしていただきたいと思います。これは当寺で作りました仏国寺・石窟庵の手引書です。どうか御参考になつて

そのあと、私たち研修団の団員の数だけの手引書が渡された。その手引書とは先程述べた説明書きのことである。大いに参考になった。深甚の謝意を表したい。

この寺に住した表訓は韓国華嚴宗の開宗者義湘の弟子であることなどこの寺の由来は華嚴宗の系統であることを示すが、この大雄殿の本尊は毘盧遮那仏ではなく、釈迦牟尼仏であるとのことである。

諸堂巡拝

大雄殿を出て、私たちは時間の関係で足早に大雄殿の後方にあら無説殿、毘盧殿、東側の観音殿、西側の羅漢殿と参拝した。羅漢殿から紫霞門の前に出て記念写真を撮った。

駐車場までの参道沿いに無窮花の花が白く咲いているのに気が付いた。太陽に映えてその白はあくまで白かった。

11..35 仏国寺出発。

車中で、鄭さんは、ラジオの放送で今気温が三四度と言つていると教えてくれた。確かに暑いが蒸し暑さは感じない。

12..00 焼肉屋「慶州カルビ」で昼食。

芬皇寺、皇龍寺址

芬皇寺

昼食を済ませ、バスに乗ると程無くして芬皇寺に到着した。山

韓國仏教研修の旅（成河）

門から境内に入るとすぐに三層の石塔が目に入った。この寺が創建されたのは新羅、善德女王の三年（六三四）とされているが、この石塔はその頃のものであろうか。伽藍は火事で姿を消すが、石造物は残り、貴重な文化遺蹟となる。

何かいわくありげな古井戸があった。それを見ていると作務衣を着た人が近づいてきて、私たちに説明してくれる。彼女は元暁大師がこの寺で修行したのだということを強調する。元暁（六一八—六八六）は『宋高僧伝』卷四「唐新羅國黃龍寺元暁傳」によれば、義湘とともに入唐し、玄奘、慈恩の門を慕うが、その縁既に差^ない、心を遊往に息^{ゆき}め、居士と同じく酒肆倡家に入ること宝誌のようであった、とのことである。『金剛三昧經論』、『大乘起信論疏』（『海東疏』という）はその代表的な著述で、後世に与えた影響は偉大なものがある。

芬皇寺のいくつかの建物は小じんまりしていて、どれもそんなに古いものではないように見えた。

皇竜寺址

私たちは芬皇寺を出て、皇竜寺址を見ながらバスに乗った。

皇竜寺は新羅仏教にとって、芬皇寺よりも一層重要な寺ではなかつたか。新羅では皇竜寺の丈六釈迦像と九層塔、それに真平王（五七九—六三二）の玉帶を「新羅三寶」と称した。皇竜寺は新羅の僧制を整備し、戒律を定めた慈藏律師が『菩薩戒本』を七日七夜講じた寺であつたし、元暁が『金剛三昧經論』を敷演した寺

でもあつた（『三國遺事』）。その創建は芬皇寺よりもさらに古く、真興王の代、五五三年である。新羅で仏教が公認されたのがその父王、法興王（五一四—五四〇）の五二七年であるから、皇竜寺はそれより三十年も経ないで建立されているのであり、新羅最初期の寺である。

現在は同寺の発掘が進められ、九層塔址、丈六尊像の台座の址等が明らかになりつつあるとのことである。九層塔は唐の太和池の附近を通ったとき、神人のお告げを受けた慈藏が帰国後善徳女王に獻言してできたものである。それには新羅の王祚が永久に安泰であるようにとの願いが込められている。新羅仏教の護国的な一面を示す好箇の例といえよう。

慶州博物館

芬皇寺からはすぐに慶州博物館に着いた。館内には多くの新羅の文物が展示してあつた。いずれも歴史的文化的価値の高いものばかりである。

「エミレの鐘」は近代的な鐘楼堂の中にあつた。鐘楼堂といつても太い四本の柱に屋根がある形式のもので、屋根から鐘が釣り下げられている。鐘身には飛天像、蓮弁などが描かれている。人身御供の子供の泣き叫ぶ声「お母さん」（エミレ）からエミレの鐘と呼ばれるようになったとのことである。統一新羅の技術が作り出した最高の文化遺産の一つである。

博物館出発。14..10
免税店到着。14..15
免税店出発。15..10
ホテルに戻る。15..30
湖畔荘で夕食。18..00
普門湖遊覧。19..10

普門湖リゾート

湖畔荘で夕食をゆっくり済ませた団員は湖畔荘に接続している桟橋から遊覧船に乗り込んだ。暫くすると船は出発した。

ほろ酔い加減の私たちの顔をさわやかに風が撫でる。広々とした湖面は波を静かにたたえ、私たちを大きな胸で出迎えてくれた。普門湖の水は四隅の雄壮な近代的ホテル群、塔などの人間の手によって作られたもの、はるかかなたに広がる山嶺、ところどころに群生する樹木などと混融する。折りしも夕日が今まさに沈もうとしていた。私たちは深遠な自然のドラマの一駒に遭遇したのだ。それは感動をもつて迎えられた。船の中の人々の目は斎しく夕日に向いている。湖面はまっ赤に染まる。人々の感動に満ちた顔も赤く映える。夕日が沈みきるとすべてが刻一刻と夜の世界へと向かう。

このところ、韓国の観光地というと、まつ先に慶州が挙げられるという。しかもそれは普門湖リゾートを中心としたものであ

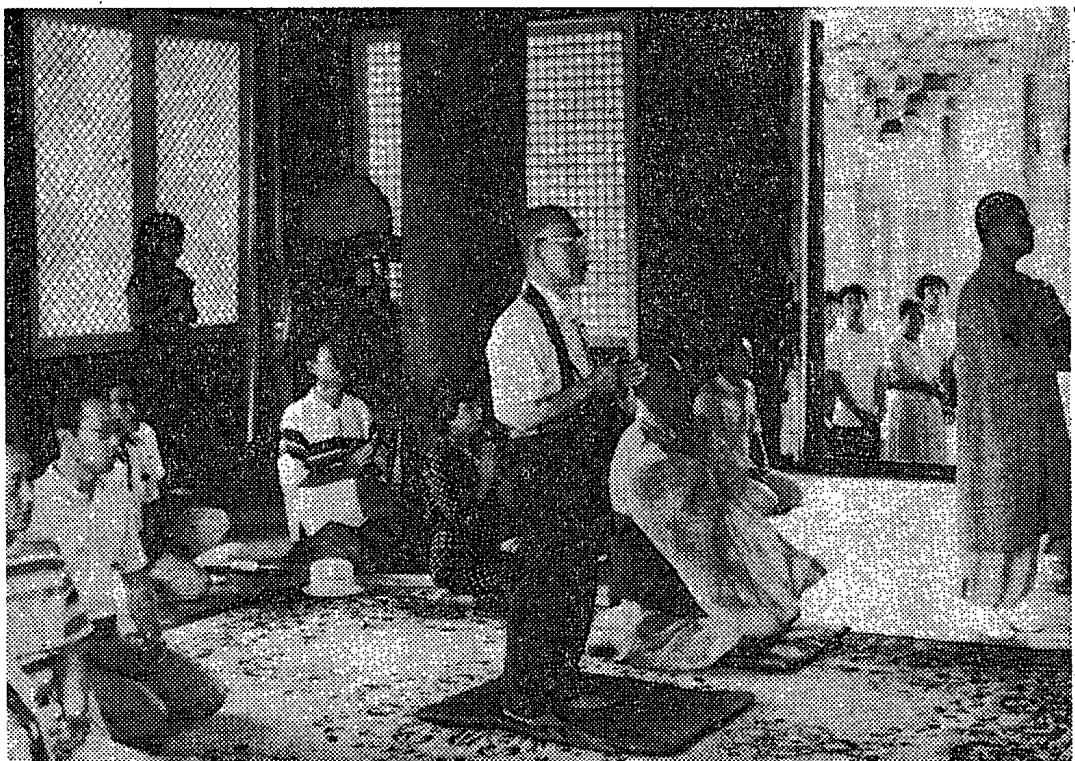
る。このリゾートは慶州市の東、約六・五キロに造った普門湖を中心最も近代的な観光、レジャー施設をつくるもので、総計三千室のホテル群、各種のスポーツ、娯楽施設、民族村、ショッピングセンター、食堂街、宴会場から国際会議場までつくるものである。三百十万坪あまりの敷地に公共および民間資金一億五千万ドルを投入し、七二年から八一年まで十年がかりで建設する計画のもとに作られた。同時に慶州市の整備も行ない、仏国寺、石窟庵、天馬塚、大陵苑(古墳公園)、各王陵、瞻星台、慶州博物館)、幹線道路などすべて一新した。沿道の家々も新羅時代の様式をとり入れたものに建てかえた(古川清徳『韓国の素顔』)。

七月二二七日(水)慶州—釜山

9..10 ホテル出発。
9..25 新羅窯到着。
10..00 高速道路に入る。
10..30 通度寺到着。

通 度 寺

下爐殿、中爐殿



通度寺大雄殿にて諷経

通度寺は一柱門よりその雄大な伽藍配置が始まる。その扁額には「靈鷲山通度寺」とある。靈鷲山といえば佛教徒は釈尊説法の地として知っている。これを山号にするのは通度寺の聖域に仏法が現前しているということを表明しているのである。人々の通行できる正面入口両側の柱には対聯がかかっていて、右側には「國之大刹」、左側には「仏之宗家」の白い文字が黒地に書かれている。

通度寺は東端の一柱門から西方の大雄殿に至る、東西の川沿いの参道の両側、すなわち南北に大小の殿閣が建ち、それらは下から下爐殿、中爐殿、上爐殿と分かれて次第に登っていく。そのそれは四角形に殿閣が配されるという伽藍配置をなす。一柱門の次は四天王をお祀してある天王門が現われる。天王門を過ぎると靈山殿、極樂殿、藥師殿、伽藍閣、梵鐘樓、万致樓などが配された下爐殿の群れがある。しばらく行くと不二門が視野に入る。垂木の下に「不二門」の扁額があり、さらに鴨居の下に「禪宗第一伽藍」の扁額も掛けられてある。不二門を抜けるとやや右手に觀音殿が建つ。その右手に皇華閣、龍華殿、開山祖堂、海藏宝閣、左手に円通閣、甘露堂などが林立する。

大雄殿

私たちは遂に大雄殿の前に着いた。大雄殿は南面していた。三方に大雄殿、金剛戒壇、大方廣殿の額があり、それぞれどこからでも入れるようになった変った形式の伽藍である。

大雄殿は仏殿のことであるが須弥壇上には本尊仏がない。そして前卓が普通あるところには八角形状の説法の台座がある。まもなく住持、曹性坡老師が入場せられ、私たち一行は次のような御挨拶をいただいた。

通度寺にお越しいただき、お釈迦様に参拝されましたこと大変うれしく思います。この寺は一、三二六年前に慈蔵菩薩によつて創建されました。中国の五台山で御開山が授かつたお釈迦様の真舍利、歯、袈裟を母体として創建されました。現在は韓半島で真舍利を奉安している唯一の寺であります。こうしたことから当寺ではこの大雄殿に本尊をお祀りせず、金剛戒壇の中心にある釈迦塔に奉安しております真舍利を本尊としてお祀りしているのです。

今後の韓国と日本との佛教者の交流を心より期待いたします。貴学にお世話をなつておられる崔氏をお助けいただきありがとうございます。皆様がお導きいただき、立派な高僧になることを祈っています。最後に皆様の御家庭の幸運をお祈りいたしまして御挨拶とさせていただきます。

そのあと、御老師と団長との土産の交換があり、私たちは大雄殿をあとにした。

慈蔵律師

御老師のお話に出てきたこの寺の開山である慈蔵律師は韓半島の佛教界にとって、中国における道宣、日本における鑑真和尚に

韓国仏教研修の旅（成河）

相当する高僧ということができよう。『三国遺事』は巻四に「慈蔵、律を定む」の一項を設けその功績を讃える。朝廷は慈蔵に僧尼の規儀闕如しているのを憂い、慈蔵に勅して大国統となし、僧尼一切の規猷はすべて僧統に委ねてつかさどらす。このことを評して「一代の護法、是に於て盛なり。夫子（孔子）が衛より魯に返るや、樂正しく雅も頌も各々其の宣しきを得たるが如し」と樂・雅・頌を正した孔子に比える。そして「この際に當り、國中の人に、戒を受け、仏を奉ずるもの十室に八九、祝髮して度を請ふもの歲月に增至る。乃ち通度寺を創し、戒壇を築きて以て四來を度せり」と述べ、通度寺創建は金剛戒壇を築いて具足戒を授けることのためであったことを明かす。

また、同書卷三「皇龍寺九層塔」は「慈蔵が五台にて授かりし所の舍利百粒を以て柱の中、並びに通度寺の戒壇及び大和寺の塔に分ち、池竜の請ひに副ふ」とあり、仏舍利は通度寺の金剛戒壇に収められていることを伝える。「通度寺創剗由緒」（『朝鮮寺刹史料』上巻所收）では終南山雲際寺において、仏頂骨および舍利百枚、袈裟一領、貝葉經一巻を感得して帰国し、金剛戒壇を築き、舍利四枚、歯牙、頂骨、經本を安置したとし、記述内容にすれば、金剛戒壇に仏舍利が安置されていることに関しては変らない。

觀音殿—釈尊のお袈裟—

前書『三国遺事』巻三「台山の五万の真身」では文殊菩薩が太

韓國仏教研修の旅（成河）

和池で、偈、釈尊の袈裟、仏鉢一具、仏頭骨一片を慈蔵に授けたと記す。大雄殿からの帰次、觀音殿を参拝したが、この中に釈尊、慈蔵のお袈裟が奉安されていた。それではこの釈尊のお袈裟は慈蔵が文殊菩薩から授かつたものということになろう。

11..45 通度寺を辞す。

12..15 ^{ブサク} 釜山インター着。

つづいて、釜山都市高速道路に入る。鄭さんが韓国第二の都市釜山についていろいろ説明してくれる。

12..40 釜山市内のレストランで昼食。

13..30 レストラン出発。

13..50 都市高速道路に入る。

14..10 梵魚寺到着。

梵魚寺

諸堂巡拝

一柱門まで幾段もの石段を登つていかなければならない。左を見ると谷川で水浴みする数人の子供たちのいかにも楽しげな姿があった。私たちにとっては涼やかな風にも似た光景である。

一柱門は太くて丸い石柱に支えられた珍らしい様式のものである。正面に「曹溪門」、右に「禪刹大本山」、左に「金井山梵魚寺」の額が掛かる。

更に石段を登ると天王門、さらには不二門が建つ。次には普濟

楼が現われる。「普濟樓」の大きな額の下に小さく「金剛戒壇」の額が掲げられてあつた。通度寺と同じくこの寺も金剛戒壇を持つてるのであらうか。

大雄殿、釈迦塔

これまでに何段の石段を踏んできたのだろう。遂にこの寺の大雄殿に着いた。団長を導師に般若心経を諷誦した。簡単な寺の説明を住僧から受け、大雄殿をあとにした。須弥壇上に本尊が如来、二体の脇侍が菩薩である三尊仏がお祀りしてあつたが、詳しく述べるゆとりがなかった。大雄殿から、三重石塔（「釈迦塔」ともいいう）、七重舍利塔の前に行き合掌した。大雄殿の奥には觀音殿があり、その東側に南北に北から毘盧殿、弥勒殿、澆洲禪齋が並んで建つ。

住持と歓談

私たちは毘盧殿の東の建物に案内され、茶の接待を受けた。一同、くつろいだ頃、この寺の住持、華嚴老師が入つてこられ、団長と隣合わせに坐り、互いに挨拶をかわし、土産物の交換をした。

御老師は「何か御質問はございませんか」と奇麗な日本語で言われた。団員の一人が韓國の仏教寺院の三尊仏の一般的な傾向についての質問をした。それに対しても御老師は

三尊仏について歴史的に明確に申しあげることはできませ
ん。よく分かつてないというのが現状ではないかと思いま

す。私どもは禪の修行一筋でやつてまいりました。心の眼が開かれれば、細かい穿鑿は無用と思うのです。

と言われ、御自分の戦争中の体験、戦後の修行の道程を語られた。別の団員が、「修行は何によつてされていますか」と尋ねたのに対し、「日本の臨済宗と同じようにしております」という答えが返ってきた。

御老師の鬚髪を蓄えた頑健な体躯に禪の修行に生きる者の純粹な眼差しが光っていた。御老師のからだから発する大らかさは国は異なれども同じく禪を探求している私たちに心の安らぎを抱かせるものがあった。今回の韓国仏教研修旅行の最後の訪問地でのこうしたくつろいだ歓談は誠に締括りとしてふさわしいものであった。

15..30 梵魚寺発。
16..20 免税店着。
17..10 コモド・ホテル着。
18..00 ホテル発。
17.. レストラン「百万石」着。

最後の夕食

レストラン「百万石」は加賀百万石を思い出す名であるが、或は加賀（石川県）と関係があるのかもしれない。日本食専門の料理店である。研修団が旅行中、ずっと韓国料理が続いたので、最

後の夜は日本食を楽しんでいただきたいという藤田トラベルの図らいでこの店が選ばれたのである。

案内された部屋は三階にあった。床には畳が敷いてあり、日本と変わらない。電気系統の故障で暫くクーラーが作動せず汗がじつとりと出てきた。料理が殆んど運ばれたところで、崔氏の師父が正装で部屋に姿を出され、歓迎の挨拶をされた。

私は崔庚満の師の吳果珊です。皆様、韓国々内を旅行され、バスの車窓から景色を御覧になつておられますと、仏教寺院は目につかず、キリスト教の教会ばかりがあるような感じを受けたかも知れません。確かに仏教の僧侶は布教を疎かにし修行だけをしてきたと言われても仕方の無い所もござります。

真理を探求する者として、両国佛教者同志の今後一層の交流を期待するものであります。貴校に御厄介になつております私どもの弟子の崔くんをどうか鞭撻していただきたい。何とも分らない日本にて尻込みしていることもあるかも知れませんが、どうか彼をお導きください。お願ひ申しあげます。また機会がありましたら、真理を探求している私どものお寺にもおいでください。心から歓迎いたします。ありがとうございました。

韓国仏教研修の旅（成河）

ばし感動のひとときを持ったのであつた。崔氏にはどうか、師匠の熱い思いやりを忘れず、立派な高僧になるべく一層の精進をしていただきたい。今回の研修旅行に際して崔さんは各寺院に予め依頼状を送り、到着してからも打合せを事前に繰り返した。ときには団長の手を取り歩行を助けた。謹んで謝意を表する。崔氏のお師匠さんは挨拶のあと団長との土産物交換をされて帰られた。その後、私たちは何日か振りの日本食に舌鼓を打つた。

20..10 レストランを出てホテルに帰る。

七月二八日（木）釜山—大阪、名古屋

李舜臣の亀甲船

コモド・ホテルの特徴は壬辰の倭乱・丁酉再乱（文禄、慶長の役）で日本軍を大敗させた朝鮮国海軍総指揮官、李舜臣の使用した亀甲船の大きな模型がホテルの前に置いてあることだ。李舜臣のことは日本では余り知られてはいないと思われるが、韓国の最大の英雄として今なお国民から尊敬されている人物である。

9..15 ホテル出発。

9..25 釜山観音食品に立ち寄る。

11..50 日本航空 968 便、DC-10 機にて釜山発。

13..06 大阪着。

バスに乗り換え、東名高速道路を通り、名古屋に向かう。途中、

吹田インターから出てレストラン 505 で遅がけの昼食をとつた。

おわりに

「近くで遠い国」韓国は今回の旅行を通じて幾分かなりとも近くなつたであろうか。いや、私たちと韓国との距離がたとえ千里万里であつたとしても、私たちは確実に一里の道を歩んだ。それを私は固く信ずる。

私は今回、研修旅行の記録の責を任つた。だが、仏教一般の知識は無論のこと、韓国に関する予備知識の不足、仏教寺院の建築物に対する無知、さらにはこの種の記録をつける上での方法、描写力のなき、観察の怠慢さ等から、十分その責を果すことができなかつたことを申し訳なく思う。

今回の旅行は一人の病人もなく無事円成できたことは實に多くの方たちの御協力、御尽力の賜である。関係者各位にここで深甚の謝意を表する次第である。旅行に先だって、同僚の佐藤悦成団員は当國に渡り、下見調査し、旅程を組んだ。さらに団員諸氏に「韓国仏教研修の業」を作成した。今回の旅行に佐藤氏のかかる努力があつたことを付記して擱筆することとした。